

思  
考  
の  
景

関根伸夫の歴史的といっ  
てよい「作品」〈位相―大地〉(1968)が、この国の  
美術界に衝撃をもたらして  
から、今年で40周年を迎える。作品が大地に埋め戻さ  
れて消滅して以来、現代美  
術史は、前衛の終焉から  
post-modernを経由し、今  
やPMすなわち脱・現代を  
も脱し、「同時代美術」と  
いう概念そのものが時代遅  
れとなつて、「同時代以降  
美術」Post-Contemporary Art  
を論じようとする趨勢を迎  
えている。その現時点に立  
つて、あらためて〈位相―  
大地〉を振り返ると、何が  
見えてくるだろうか。

この「作品」は須磨離宮  
公園の地面を、円筒形に直  
径2.4m、深さ2.7m掘り下  
げ、その土砂を隣の土地に、  
同型の円筒形の立体に積み  
上げたもの。とりあえずは、  
そう記述できる。2003年  
には鷺見和紀郎らが再制作  
を試みた。だが公開に際して  
円筒柱成型用の外枠合板を  
束ねる綱を解く最終段階  
で、土砂が覆いを薙ぎ倒し  
て崩落し、無粋な残骸を人  
目に晒した。理屈は単純な  
造形だが、実際に盛り土す  
るには、いかに容易ならぬ  
物理的制約が立ちほだかっ

連載103  
関根伸夫「位相―大地」40年  
敗戦後日本を代表する前衛藝術の記念碑を、現時点から再検討する」上

国際日本文化研究センター研究員、  
総合研究大学院大学教授  
稲賀繁美

ていたかが、追認された。蟹伍一個分の地球大気は逃  
がしたが。この着想によ  
って、赤瀬川は同時代のクリ  
覚のトリックを見る見解が  
ストの梱包藝術を、理念と  
して凌駕してみせた。

ここには、極東にあって、  
西欧藝術に追いつこうと躍  
起な対抗意識と、日本列島  
文化特有の、文化の掃き溜  
めの劣等感が垣間見られ  
る。だが、それを60年代末  
当時の世界史の状況に重ね  
合わせると、どうだろう。関  
根たちの肉体労働によって  
掘削された地下部分を、原  
材料輸出国で採掘された鉦  
球は空になり、隣に別の地  
球が出現する。そんな思考  
実験が本来の意図だったと  
も、作家自身は述べる。

これは、聖アウグスティ  
ヌスの語る、柄杓で海の水  
をすべて汲み出そうとして  
いる少年の逸話を想起させ  
る。それは有限な被造物に  
造物主たる神の無限を悟ら  
せる譬え話だった。

関根のこの証言が妥当す  
るならば、そこには赤瀬川  
原平の《宇宙の缶詰》(1964)  
に類比した発想が窺える。  
赤瀬川は蟹伍の中身を捨て  
て、ラヴェルを内側に貼り  
替え、ハンダ付けすること  
で、地球全体を缶詰の「内」  
に閉じこめた——惜しくも

さらにこの世界経済の構図  
を、藝術の世界に重ねてみ  
れば、どうだろう。  
そこには、非西欧世界か  
らの文化資源搾取によって  
成立する、西欧前衛藝術の  
金字塔(例えばピカソの《ア  
ヴィニョンの女たち》(190  
7)の始源主義)という、世  
界史的なモダニズムの基本  
構造までもが、そうとは意  
識されぬまま、位相幾何学  
の意匠をまとめて密かに投  
影され、作品として提示さ  
れていたことになる。

(以下次号)